

# イデオロギーとしての言語と社会科学の 階級性批判

(経済政策本質論 その四)

前 川 忠 良

はしがき

一、スターリン言語学批判

(一) スターリンによる言語の規定

(二) 言語

(三) 数

(四) 批判

二、社会科学の階級性批判

(一) 階級的社会科学論

(二) 認識の相対性

むすび

イデオロギーとしての言語と社会科学の階級性批判

## は し が き

スターリンは「言語は上部構造ではない。」という。「言語は上部構造ではない。」ということは、「言語はイデオロギーではない。」ということの意味しないのかも知れぬ。即ち、上部構造にはマルクスのいわゆる「イデオロギー諸形態」の凡ては含まれないのかも知れぬ。たしかに、マルクスもイデオロギーの意味を少し異った意味に於て用いられている場合があるようである。例えば、「経済学批判序説」に規定された上部構造の内容には、言語とか、数学とか、自然科学とかいう用語は用いられていない。然し、言語・数学・自然科学等はいわゆる上部構造の内容としての「イデオロギー諸形態」には含まれないのか。スターリンは「言語は上部構造ではない。」として、「イデオロギー諸形態」から除去しているが、これは誤りではなからうか。言語は極めて社会関係的なものであるが、かかる論理からは当然、自然科学や、数学は上部構造としての「イデオロギー諸形態」から除去されねばならない。然らばスターリンは自然科学や、数学のイデオロギー的階級性を否定するのか。吾々はマルクスが上部構造の内容として規定した「社会的イデオロギー諸形態」という用語の、「社会的」なる限定の意味を充分理解する必要があるとしても、自然科学や数学の社会的規定や、階級性を否定することは出来ない。

又スターリン言語学批判について、社会科学の階級性批判を開陳するのは、全く矛盾しているように見えるかも知れない。即ち、前者はイデオロギー諸形態としての言語の非階級性論を論難し、後者はイデオロギー諸形態としての社会科学の階級性論を論難するからである。即ち、かかる矛盾した主張は同じ論理体系の中に統一されることを示すものに他ならない。人間のイデオロギーも又、人間が矛盾せる存在の統一であるように、矛盾せる二つの意識の統一として把握されねばならないからである。

## 一、スターリン言語学批判

### (一) スターリンによる言語の規定

吾々はスターリンの言語の規定を問題にする前に、先づマルクス、エンゲルスによって如何に把握されているかを見よう。

マルクスは経済学批判序説で、土台及び上部構造を規定し、イデオロギー諸形態を論ずるが、既に明らかにした如く、彼はイデオロギーの概念を極めて一般的、且つ極めて広い概念に於て把握している。ここにはマルクスは言語という用語を用いていないが、彼が言語をイデオロギー形態として把握した事は他の部分をひもとくことによって明らかである。即ち、

「法制上および政治上の上部構造が、その社会の経済的構造のうえにそびえ立ち、一定の社会的意識諸形態がそれに照応する。」

「経済的基礎が変動するにつれて、巨大な上部構造のすべては、あるいは徐々に、あるいは急速に変革する。かかる変革を観察するにあたっては、われわれはつねに、経済上の生産諸条件に起った物質的の自然科学的に忠実に確証されうる変革と、人間がかかる衝突を意識するようになり、かつこれを戦い決するところの法律の・政治的の・宗教的の・芸術的の・あるいは哲学的の・簡単にいえばイデオロギー的の・諸形態とを区別しなければならぬ。」

「……人間は意識をもたもっているということを見いだす。けれども、その意識もまた、はじめから『純粹』の意識として見いだすのではない。『精神』ははじめから物質を『負わされて』いるという呪いをうけている。このばあいにはこの物質は、運動する空氣の層、音響、つまり簡単にいえば言語という形式であらわれるのである。言語は意

識と同じだけ古いものである。——言語は、実践的な、他の人間にたいしても存在し、したがって、私自身にたいしてもはじめて存在する、現実的な意識である。そして言語は意識と同じように、他の人間と交通しようという欲望あるいは必要からはじめて発生する。」

然し乍ら、スターリンが言語を上部構造に含めないと主張することによって、上部構造について、多くの混乱と誤りが横行している。このことは又上部構造としての国家の政策の理論的把握の問題を混乱に陥れているといわねばならない。

この意味に於て、上部構造を問題にする為には先づ、通説にまで拡大され、俗流唯物論の根源となったスターリンの「言語におけるマルクス主義について」の誤りを明らかにする必要がある。

スターリンは、「言語におけるマルクス主義について」、「言語学の若干の問題によせて」、「同志諸君への答え」の諸論文を発表したが、これについてエルスナーは「多数の科学者たちはスターリンの著作によっていっさいの科学の躍進がはじまった。」と称讃し、「かなりの多くの理論的問題、とくに言語学と哲学におけるそれが解決されたのである。」とその極度に大きな成功を称えている。勿論現在マルクス学界に於て、ソ聯、中国、日本等に於ても、スターリンの言語学に関する誤りは種々指摘されている事も事実である。

即ち、彼の諸論文には理論上の色々の不明確さのみならず、幾つかの誤りを含み、且つこの為には理論上の諸混乱をひき起した原因を含んでいる。スターリン流の用語を用いれば、「マルクス主義を歪曲し、俗流的観念論に屈服して、プロレタリアの階級的立場を忘れた裏切り者」ということになるだろう。

彼は言語について大略次の如く規定する。

一、言語は土台の変化に応じて変化しないから上部構造ではない。

二、言語は社会の全階級に奉仕するから上部構造ではない。

三、言語は交通手段である。生産手段が階級的でないように言語は階級的ではない。

四、言語は中間現象でないところの社会現象である。

吾々は彼の誤りを明らかにする為に言語について分析してみる必要がある。

## (二) 言語とは何か

動物の口及び舌は、飲食器官であると同時に発声器官でもある。人間が飲食をし、発声することに於ては、本質的に動物と何ら相異はないが、動物の自然に備った本能的な発声と人間の言葉とは、歴史的、発展的に、歴然たる相異がある。動物の発声は集団間の、雌雄間の、親子間の伝達行為である。人間の言語発声も人間相互間の伝達行為であることには変りない。唯人間の場合には、その頭脳及び、発声機関の発展に伴って、その発声の音響上の相異を認識し、表現対象の夫々の特殊性に応じて各種の発声を組合せ、創造し、且つそれを正しく発声する努力によって、夫々の発声の相異を言語として把握したのである。吾々は動物の本能的属性にすぎなかった音声が、人間の意識的実践的成果としての言語に転化したことを知る。従って、動物の本能的な集団間の伝達行為としての発声は、人間に於ては社会的な伝達行為としての意識的な言語発声に発展した。その意味に於て言語は人間の社会関係の産物である。

然し乍ら、吾々は社会という用語を用いるが、動物の本能的集団を社会とは呼ばない。厳密な意味に於て社会関係とは生産関係を重要な要因として含む。即ち、言語は極めて生産関係の要因を含む。

吾々は生産ということを考える場合には、資本主義に於ては価値形成乃至は増殖過程と、労働過程との統一として把握する。前者は生産の社会的側面であり、後者は労働の自然的側面である。

吾々は且つて人間の意識、意志を人間の重要な側面として把握したが、人間の意識、意志の發生發展は、人間の労働という生産的行為の發展との弁証法的相互作用の結果であつた。従つて、労働のない意識、意志の發展もなく、人間の意識、意志の伴わない労働もない。実践によらない認識もなく、目的意識のない実践もない。人間が認識し、意識し、生産意志をもつ為には、労働対象に対する個別的認識と、總括的認識とを得なければならぬ。個別的認識とは畑であり、土であり、種子、水、稲の葉であり、幹であり、花であり、実であり、その他生産に關係ある様々な要素についての認識である。總括的認識とは、それら生産諸要因の相互作用であり、稲の生育過程である。吾々人間は、対象の個別的認識を單語によつて夫々認識し、生産諸要因の相互作用や稲の生育過程をその論理構造として言語文章によつて認識する。それら個別的認識と總括的認識とは実践的生產過程に於て徐々に獲得せられ、かくて認識は意識となり、生産意志となる。即ち、言語は労働過程に於ては認識手段であり、又表現手段である。かくて人間個々人の言語の發生過程は、社会的關係に於て表現手段として、社会人相互間に止揚され乍ら、統一的言語が形成される。かくて初めて言語は社会的關係に於て傳達、機關としての機能を果すのである。マルクスは言語を「人間の表象作用、思惟作用、精神的交通」という用語によつてこれを表現している。即ち、言語は單なる社会關係の成果ではなく、人間と自然との關係としての、狹義に於てはいわゆる労働過程の成果でもあるのである。従つて、言語も又社会的側面を持つと同時に自然的側面も持つのである。

その意味で、言語は社会關係であり、生産關係であり、従つて又歴史的所産であり、階級社会に於ては当然階級的性格をもち、又資本主義社会に於ては資本主義的性格をもつ。又その反面、認識、表現、傳達の為の手段であり、人間の認識の發展に伴つて發展するが、それは技術的な、従つて無階級的な全社会的性格をもつ。

そのことは言語も又矛盾をその内容として含み、社会の發展と共に發展し、土台の變化と共に變化する性格がある

ことを示す。「貴様」という用語は且つては敬語的であっても、現代は敵対的用語として用いられる場合がある。然し、又それは相手によつては親愛の表現である。それは言語技術的には対象を指すものであつても、社会的には種々の内容を持つものである。社会的矛盾は言語矛盾に反映して（矛盾とは觀念弁証法的なそれではない。言語構成の觀念的な分析による矛盾ではなくして、唯物弁証法に於ける矛盾とは社会的なものの反映であり、言語に内在する矛盾とは言語そのものではなく、言語の社会的關係に於て現われる處の矛盾の反映なのである。）その文字の形態変化を伴うか、消滅するか、又はその内容の変化として現われるのである。

### （三）数とは何か。

彼らは言語を上部構造すなわちイデオロギーではない例として、数の問題をひき出す。数とは果して何か。

数もまた物の反映としての意識形態である。吾々人間が実在する物を五感を通じて把握する時、物の二側面に於て反映される。物の二側面とは質、量の統一としての二側面である。物は質的存在であると同時に量的存在である。

吾々は沢山の花を見ることによって、そこに花という質的な同一性を見出すとき、花という言葉によって一つ抽象的表現を行う。然し、この抽象は二つの異つた内容を持つていることを先づ明らかにする必要がある。

一つは、自然界には色々の種類の植物があるように、色々の花がある。然しそれらは花卉の形態、色彩、をしべ、めしべその他種々の相異があつても、それが植物にとつては種族保持の爲の生殖機関であり、それは結果して次代の種子を形成することに於て共通点が見出せるならば、それらの共通の表現として、花として把握される。それは色々の種類のバラの花があつても、それがバラの花として抽象される場合よりも、より高次の抽象として一般に花として把握される場合である。

然し、吾々が問題にするのは次の意味に於てである。即ち、物質としての花は質量の統一である。たとえ沢山の花の場合であろうと、一本の花の場合であろうと、質量の統一物としては同様である。吾々は前の場合と次元を異にして質的表現として花という言葉把握する。言葉としての花は、量的表現としての数と対立したものとして把握されねばならない。花という言葉は現実にある質量統一としてのこの花、あの花ではなくして、かかる實在せる花を質的抽象したものが言語としての花である。と同時に、質的に同一の花を量的に数として区分する。数とは物の量的抽象による把握である。吾々は「この花」とか、「私の家の庭にあるバラの花」とか、定冠詞乃至は、一つの限定を与えることによって、具体的實在を指示する。だが、不定冠詞的な、一般的な把握として、質的抽象として花という概念と、量的抽象として数という概念を得る。だが、量的な概念の数は常に質的規定を受けなくては存在し得ない。それは花という概念が単なる觀念的所産ではなくして、常に量的規定を受けなくては存在し得ないのと同様である。

物の實在乃至運動の質的抽象が行われたものとして、単語が生れ、文が構成され、論理構造が形成される。（論理學も又俗流唯物論者は上部構造から除去する。クジミン「論理學入門」）

物の實在乃至運動の量的抽象が行われたものとして、数が生れ、数式が構成され、数学が展開される。二なる数字は物の實在の靜的抽象であり、 $1+1=2$ という数式は物の運動の動的抽象であり、文章に動詞、助詞、副詞等が必要であるように、数式には $+$  $-$  $\times$ があり、 $=$ が用いられる。

但し、量的抽象が行われ得る為には、質的には同質であることが前提でなければならない。二という数字も、 $1+1=2$ という数式も、決して、一つのリングと一つのミカンとは二つのリングとミカンであるという意味ではない。質的な側面の捨象は質的同一性という規制の下での捨象であって初めて可能なのである。

三浦きよし氏は真理の相対性を説明する為に次の如き数式を引用している。（「弁証法とはどんな科学か」）



『1に1を加えると2となる』『 $9 \div 2 = 4.5$ 』

これは小学生がおそわっている数学の公式で、誰も真理であることを疑いません。一人の学生がいるところにいま一人加わればたしかに二人になります。九キロの米を二等分すればたしかに四キロ半になります。ではあらゆる場合に真理である、絶対的である、ときめてしまいいいでしょうか。いまかまの中に米を一升入れ、その上から水を一升入れます。二升になるでしょうか。これらの場合、公式は誤謬になります。公式には限界があり、一定の条件においてのみこれらの公式が適用できる、という意味で、科学のどんな公式もやはり相対的真理だということになります。」

この説法には二つの誤りを含んで居る。一つは既に明らかなように、言語と数に対する把握の不充分さであって、 $1+1=2$ という数式は質的同一性が前提として規制されているのであって、 $1+1$ は一つのみかんと一つのみかんの関係であっても、一つのみかんと一つのリングの関係ではないのである。一つのみかんと一つのリングを加えても決して二つにはならない。それはあくまでも一つのみかんと一つのリングにすぎない。たとえそれをミキサーにかけて同一質としての液状にしたとしても、その時は既に他の質に転化したところのコップ一杯のジュースにしかならないだろう。一升の米と一升の水は、 $1+1=1$ では表現は出来ない。九キロの米は二等分して、 $9 \div 2=4.5$ と表現出来ても、九人の学生を二等分して、 $9 \div 2=4.5$ と表現することは出来ない。

氏の、もう一つの誤りは、認識の相対性とはここで説話されたような内容を指すものではないという意味であり、それについては後章に於て明らかならしめよう。

#### 四 批 判

吾々はここにスターリンの言語学についての諸論文は極めて粗雑であり、非学問的であることを指摘することが出

来る。

「言語は土台のうえに立つ上部構造であるというのとはただしいか。」という設問に対して、スターリンは次の如く説明する。「土台というのは、そのあたえられた発展段階における社会の經濟制度である。上部構造とは、社会の政治的・法律的・宗教的・芸術的・哲学的な見解と、これに照応した政治的・法律的その他の機関である。」と。かかる土台、上部構造に関する彼の根本的理解に於て機械論的誤りを犯している事がわかる。

「あらゆる土台は、それに照応した特有の上部構造をもっている。土台が変化しなくなると、これにひきつづいて、その上部構造も変化しなくなり、新しい土台が生れると、これにひきつづいて、それに照応した上部構造がうまれる。」言語はこの点で上部構造とは根本的にちがっている。」

即ち、彼は言語は土台が減びても残るから上部構造ではないという。これは正しいだろうか。

彼はロシア語を例にあげて説明するが、逆に吾々は言語が土台によって変化する例をあげることが出来る。朝鮮語は朝鮮民族の言葉であったが、日本の支配下にあった時代には日本語が強制的に通用させられたし、戦後日本の經濟制度的変化は、他の上部構造の変化と同様に、アメリカの支配力が影響し、言語使用に英語が汜濫し初めている。即ち、スターリンが言語が上部構造でないとしてあげる理由そのものに誤りがある。

又逆説的には「変化しないものは上部構造でない」ということは、上部構造は必ず変化するものだという考え方である。いわゆるイデオロギー諸形態としてあげられるところの宗教、例えばキリスト教は凡ゆる社会制度を貫いて歴史的に現在まで存続しているではないか。キリスト教は土台が減びると同時に消滅はしなかった。勿論或る程度は変化し、分派し、盛衰をくりかえして来はしたが。

この二つを指摘することによって、スターリンが曖昧な事実から独断的に主張している誤りは明らかだが、それに

反論する私の二つの主張は相互に矛盾していることがわかる。ということとは上部構造としての言語は土台の変化に従って変化する面と、変化しない面との二つの矛盾した側面を持つものであるということを意味する。

スターリンの如く土台を経済制度だと考えるならば、社会体制が革命によって急激に変化した場合には、上部構造も急激に変化しなければならない。マルクスは上部構造の変化は或いは徐々に、或いは急速に変化すると云い、上部構造の夫々の特質によって、夫々の面によって異なることを示している。

又「上部構造が土台によってつくられるのは、土台に奉仕するためであり、土台が形成されつよくなるのは、能動的に援助するためであり、古い、寿命のつきた土台を、その古い上部構造もろとも根絶しようと能動的にたたかうためである。」とするが、スターリン的ドグマの面目躍如たるものがある。土台から作られた上部構造は当然土台に奉仕し、能動的に援助するが、同じ上部構造が、何故今度は逆に古く、寿命がつきたからといって土台を根絶しようとするのか。古いとは誰が判定するのか。そして古い上部構造自らが、自分自身を根絶しようと努力するのか。彼の考えは上部構造を政治と反権力斗争とに還元して了っている。即ち、又土台に奉仕しないものは何故上部構造ではないのか。その理由は何ら明らかでもなく、逆に土台を根絶するのは何故上部構造であるかは明らかでなく、そこには論理上の矛盾さえ伴っている。

「どの階級にたいしても同じような態度をとる立場にうつるならば、……上部構造ではなくなるだろう。」「言語は社会にとって単一な、社会の全成員にとって共通な、……社会の凡ての階級に同じように奉仕することにある。」だから、言語は上部構造ではないと。

即ち、土台に奉仕するものでなく、特定の階級に役立つものでないから上部構造ではないというわけである。このことは、彼が土台を経済制度だと機械主義的に規定し、更に経済制度を階級関係と同一視することに基く。経済制度

を階級關係に還元して了うことは、同じ階級制度であるところの、奴隸制度、封建社会、資本主義社会の質的差異を見失うことになるだろう。

「言語は階級的でないから上部構造ではない。」ということは逆説的には、上部構造は階級的なものであることを意味する。何故上部構造は階級的なものでなければならぬかという理由も明らかでない。

彼は言語は階級的でないと主張するが果してそうであろうか。階級社会の土台の上では、言語は階級的な性格を持つことがある。日本に於ける封建貴族に於ても、又封建社会の武士階級と農民とはその用語には相異するところがあったことは事実である。それをスターリンは、貴族語は言語としての独立性がないから問題にならないというのは詭弁である。又「階級的方言」と云う用語を用いて自己矛盾を陰蔽しようとする。むしろ、一つの民族語の中に階級的な貴族語が発生するのである。何故なれば、貴族語は封建時代に於ける貴族の漢文や、帝政ロシアに於ける貴族のフランス語等ではなくして、民族語の中に階級的なものがあり、前例の漢文やフランス語は階級の特種語であって、特種階級の一般的用語ではない。階級用語というものは階級的用語であって、同時に一般的な民族語の役割を果し得るものでなければならぬ。異った階級間の意志の疏通の不可能な二つの言語があるとすれば、それは言語の階級性とは云えないし、土台が階級社会である場合には上部構造としての言語に相異なる二つの言語があるということではない。異った階級間で尚且つ交通手段としての役割を果すところの民族語の中に、階級的用語が存在することを意味する。スターリンが帝政ロシアに於ける貴族のフランス語を階級用語として把握したとするならば、それは必ずしも言語の階級性を意味しない。

然し、前述せる如く、且つて朝鮮を日本語が支配し、又現在英語が世界に広く用いられる傾向が強いことは、交通手段としての機能のみではなく、一面では言語の階級性の現われとして見る事が出来るのである。これはマルクスの

云う、下級形態としての諸方言が上級形態としての単一の民族語に発展する必然性とは問題が異なるのである。支配階級乃至支配国家の用語が経済的支配の確立に伴って、被支配階級乃至国家の用語を征服するのである。

同様の事は又文化に対しても云うことが出来る。スターリンはレーニンが「資本主義の下ではブルジョワ文化とプロレタリア文化の二つの文化があることを認めた」のは正しいと云っているが、文化とは果して何を指すのだろうか。パチンコや頹廢的エロ小説を、又ソ聯の政治宣伝映画を文化と解するならば、二つの文化があることになるが、culture なる用語は漠然とした意味内容であっても、物質的な、又精神的な人間生活の向上を意味している。レーニンは通俗的な表現として文化といったにすぎない。又スターリンは上部構造としての道德について次の如く云う。「観念、表象、道德、道德原理、宗教、政治が、ブルジョワとプロレタリアとでは正反対であるというのは、全く正しい。」と。而らば、殺人はプロレタリアでは罪であるが、ブルジョワにとっては善であるのか。もしそうであるならば、階級国家ではブルジョワ用とプロレタリア用の二つの刑法を作らねばならないだろう。現実はいかかろ空論に反して、一国の刑法は常に一つであって、プロレタリアにもブルジョワにも適用される。

又スターリンは「言語が存在するのは、言語がつくられているのは、人間の交通用具として社会全体に奉仕するためであり」、そしてその意味で生産用具と変らないし、従って言語は階級的でないと主張する。

かかる規定の仕方は極めて学問的でない。生産手段と言語とは根本的に異っておるものである。ここでは階級性の問題についてのみ論じよう。

スターリンが生産手段にブルジョワ的概念を持ち込んだのは、彼が階級についての基本的性格を忘却しているものと考へざるを得ない。（拙稿「生産力の概念について」経営と経済第七〇号）彼が生産手段を全人民に役立つものと規定することは、極めて抽象的であり、観念的である。資本主義社会に於ける生産手段は極めて階級的な存在であっ

て、凡て資本家の所有であり、資本家の利益の為に労働者と対立する。

一般的には生産手段は可能性として労働力に奉仕する役割を果たすことが出来るものにすぎない。生産手段と言語の相異は、その使用方法や所有関係によって決定される。階級は単なる位階勲等ではない。階級とは物質的な、特に生産手段の所有関係と、それを保証する暴力関係に他ならない。生産手段が階級的性格を多分に持つのは、（スターリンの考えに反して、）その所有関係に規定されるからである。之に反して言語は暴力によっても独占することは出来ない。言語は所有関係が生じ難いという一般的性格によって、言語は階級的性格が少ないのである。人間は無一文であろうと、又如何に束縛されようと、舌がある限りは言葉を、少くとも意識（言語）を持つことが出来る。唯イデオロギーについて所有関係が発生しうるのは、イデオロギーの生産手段（新聞、ラジオ等）の所有、支配関係を通じてのみである。スターリンが所有関係を考慮せずして、言語が階級関係でないというのは、事實は所有関係が生じ難いから階級的性格が少ないという理由によるのである。上部構造としての芸術も又人々の観賞の対象である限りは階級的性格は少ない。それが真に階級的であるというのは、美術品が特定の階級の所有と観賞に帰せられるからである。

言語は単に交通手段であるばかりでなく、認識手段であり、表現手段である。且つ言語は認識そのものである。然し乍ら、言語が手段であることによって上部構造であることを否定する理由にはならない。上部構造としての国家や、法律は、支配階級にとつての支配の用具である場合を考えてみれば明らかである。

又スターリンは「上部構造と言語にはもう一つの根本的な差異がある。上部構造は、生産、人間の生産的活動と、直接にむすびつくのではない。それは間接に、つまり、経済機構を通じて、土台を通じて結びついているにすぎない。」と主張する。この場合でも同様に生産と直接に結びついているか否かが、何故上部構造の資格条件となるのかは明らかでない。又言語は生産だけではなくて消費とも直接結びつき、人間の活動凡てに結びつくのである。

これらの諸点から明らかになったことは、民族には民族の言語があり、又その民族に於てはその経済制度の変革に拘らず、一般的に言語は發展はしても、本質的には變化しないということである。この二つの現象は二つの事実を示している。経済制度は同じであつても、夫々の民族乃至國家に於て夫々の民族語をもつことは、言語は土台の上に立つ上部構造であることを示している。又経済制度の變化には言語は發展しても本質的には變化しないことは土台から規定されない面があることを示している。

又生産手段は物を生産しても、イデオロギーそのものを生産することは出来ない。ただ、イデオロギーを活字を通して表明するにすぎないのに対して、文字は手段であつても同時にイデオロギー的内容を表現しなくては存在し得ない。花という文字は同時に花という物体の認識を表明する。花という言葉は人間意識の表現としてのイデオロギー形態である。言語はその意味でイデオロギーそのものである。勿論、厳密に云えば、文字は視覚によるところの、言語は音声聴覚によるところの認識、表現、交通手段であつて意識そのものではない。

上部構造は土台から規定せられるが、階級性を強く反映するものと、少ししか反映しないものがあり、言語は後者に属するのであつて、上部構造であることには變りない。スターリンが上部構造は階級的なものという固定觀念に支配されて、機械的に狭く解釈していることから、かかる誤った觀念に陥つたのである。

スターリンは同志クラシエニンニコワの「言語は土台にも上部構造にも固有の現象であるとみなすことが当をえたことですか、それとも言語を中間現象とみなすことのほうがよりたゞしいでしょうか。」という問に対して、「言語は社会が存続するあいだ中、作用するいろいろな社会現象の一つである。」「社会現象としての言語には、土台も上部構造もふくめたその他いっさいの社会現象に奉仕すると同じように、社会に奉仕する。」「社会現象には、たがいに區別しあい、科学にとってなによりも重要な特有の特殊性がある。」とし、社会に於ける交換手段として、生産、経済關係、

政治、文化、社会生活、日常生活、その他、これらの協同作業を調整する可能性を人間に与える手段として社会に奉仕する点にある。従つて、言語は土台でもなく、上部構造でもなく、そのあいだの中間現象の部類でもないと言明する。

スターリンは言語を社会現象というが、社会現象についての適確な説明は何もない。社会現象という曖昧なものは何なのか。上部構造、土台、社会現象は同じ範疇に属する用語であるのか。もしそうであるならば、この三つの關係について概念を明示しなければならない。社会現象を單に、人間の歴史に何らの本質的影響を与えないものという意味で、土台、上部構造から除かれたものであらうか。逆に、土台、上部構造は社会現象と無關係なものであらうか。スターリンが言語を社会現象であるということは説明にならない説明という他はない。彼の説明によれば、宗教も芸術も土台が變化したからといって急速に變化するものではないという意味で、社会現象ということになるだらう。

## 二、社会科学の階級性批判

### (一) 階級的社会科学論

經濟政策学は政策主体の目的意識的行動の分析を除去しては成立し得ない。むしろ、政策主体の目的意識的活動を主要な分析対象とする。然し乍ら、政策主体の目的意識的活動は、当然政策主体のとする価値判断をその出発点としなければならぬ。然し、価値判断は、本来主観的なものであって、個々人の価値判断は必ずしも一致しないし、社会的立場の相異は、当然、価値判断の相異をもたらさざるを得ない。即ち、主観的価値判断は、客観的法則を求める社会科学の内容を形成することは出来ない。而らば、經濟政策としては、政策主体の価値判断を如何に内包すべきかは、



最も基本的問題とならざるを得ない。

価値判断については、種々の論争が行われている事は周知の事実であるが、いわゆるマルクス主義に於ては、ブルジョワ科学の階級性を一方では非難しつつ、他方ではプロレタリア経済学の正当性を主張する矛盾が極めて支配的な傾向にあるが、マルクスはマルクス主義経済学の階級的立場を彼らのような表現で主張したのだろうか。

マルクスは、且つての経済学は、社会の支配階級の政策目的を反映した経済理論であつて、従つて、社会科学としての経済学は凡て、階級的なドグマにすぎなかつた事を暴露した。マルクス以前の経済学は階級的ドグマであつたが爲に、資本主義の法則を分析し得なかつたと批判し、労働者階級の成立に伴つて初めて資本主義の客観的法則が認識せられるのであるとした。

吾々は社会科学の階級性を主張するいわゆるマルクス主義理論を検討してみる必要がある。社会科学は階級的ドグマであつたという歴史的事実の分析から進んで、更に一部のマルクス学者は正しい科学は階級的立場をとらねばならぬし、その階級は歴史的発展を荷う階級でなければならぬとする。

即ち、資本主義的生産様式の上昇期に於ては、資本家階級は生産的階級として生産の媒介的主体の地位を占め、従つて彼らの経済政策は、生産的であり、その限りに於て、歴史的妥当性をもち得た。然し乍ら、資本主義に於ける生産力の発展は、資本主義生産関係を桎梏として意識せしめるようになり、資本主義の発展によつて、物質化され、機械化され、完全に自己疎外された直接的生産者層（プロレタリアート）を中核とする斗争によつて、新たな生産力の発展に照応する生産関係を作り出すに至る。ここに直接的生産者階級の社会的「価値意識」、「価値基準」が資本主義の内在的必然性によつて登場し、且つそれが歴史的客観性をもつこととなり、それによつて諸政策に対する価値判断を下し、経済政策のあるべき方向を科学的に指示することが出来ることとなる。すなわち、社会の歴史的発展の必

然性として、生産力の増大を認めることが出来るが故に、生産的立場をとる階級の認識は常に客観的であり、科学的であることとなる。端的に云えば、生産力の立場をとる限り科学的立場であると極論することとなる。

生産力の発展が歴史の必然であるから、生産力的立場に立つ認識及び価値判断は科学的であるとするのは、論理の飛躍であろう。勿論、科学的であるということ、科学であるという事は自ら別でなければならぬ。科学的という概念形容は、科学プラス・アルファを意味し、吾々の求めているものは、科学そのものでなければならぬ。又社会科学としてのマルクス理論を階級斗争の手段として解消してうならば、それは科学としてのマルクス主義を、彼らが階級的だと非難するブルジョワ経済学と同列に引きずりおろすことにしなければならないだろう。

即ち、彼らは階級社会では階級斗争は必然的であり、その中にイデオロギー斗争がある。社会科学は階級的であり、且つ階級斗争の有力な武器である。それ以上に、階級斗争に打ち勝つ為に、社会科学はその階級性を明白に打ち出さねばならないと主張する。吾々は価値判断を伴うイデオロギーと、単なる客観的認識にすぎない科学とを混同してはならない。又資本主義の客観的発展の法則の認識と、階級斗争の手段とを混同してはならない。手段は認識の実践化、即ち、法則の主体化されたものであつて法則そのものではないからである。

かかる論理飛躍は多分に危険である。社会科学は常に現実的であり、歴史的存在であるという事実は、社会の客観的発展の法則の認識が党派的でなければならぬことにならない。彼らはマルクス経済学の階級性と労働者階級の主観的価値判断の客観的妥当性を主張する。これは社会科学としてのマルクス経済学を不当にゆがめるものと判断する。科学はあくまで主観的イデオロギーから、従つて階級的立場から超越しなければ、その客観性は主張し得ないものと思う。マルクス経済学は労働者の為の経済学でもなく、唯物弁証法は社会主義実現の為の手段でもない。マルクス主義唯物弁証法は科学の唯一の正しい方法論であつて、価値判断を伴わない、従つて階級的立場をイデオロギーとして持たな

いものでなければならぬ。

## (二) 認識の相対性

俗流マルクス主義者がマルクス経済学の党派性を唱える理論的根拠は、唯物弁証法に於ける認識論、実践論にその基礎をおく。即ち、認識論に於ける真理の相対性をその根拠としていると判断される。

既に明らかな如く、唯物論に於ては存在が意識を決定するという。すなわち、物質が觀念に優先し、觀念を本質的に規定する。すなわち、このことからして、彼らは吾々の資本主義社会は階級社会であり、労働者は労働者階級に規定された意識をもち、資本家は資本家階級として規定された意識をもつ。マルクス主義者は、資本主義はその発達に伴って、内部矛盾を激化せしめ、社会の矛盾の増大は必然的にその崩壊を招来し、社会主義社会がそこに発生する。

従って、社会の生産力の発展を荷う者は労働者階級であると説明した。然し乍ら、唯物弁証法という認識の相対性とは、かかる意味での階級性ではないのである。真理は常に相対的であるという意味は次のことを意味するにすぎない。

一つは認識は歴史的に限定されるという意味である。吾々社会の、乃至は世界の将来に関する予測は、その過去の歴史をひもとく事によって、或程度予測は出来ても、正しく判断することは不可能である。認識客体としての社会はその発展につれて、原始共产社会、奴隸社会、封建社会、資本主義社会へと生産様式の変化を伴ったが、封建社会に於て、資本主義の正しい認識は不可能である。社会主義発生以前の資本主義社会に於ても、社会主義社会の認識は空想の域を出ないだろう。かかる意味に於て、社会の発展段階の認識と雖も歴史的限界があるという意味である。

又認識主体としての吾々も、かかる一定の歴史的発展段階に規定された存在にすぎない。従って、吾々の認識は、認識主体と客体との両面相俟って相対的なものにすぎないのである。

又一つは認識対象としての物質は無限の内容をもっている。物質についての科学的認識は益々その精度を高める事が出来ても、尚吾々は物質の或一部分を知り得ているにすぎない。将来吾々は物質世界を科学の発達によって、より精密に認識する時代が来るだろうが、そういう意味に於て、吾々の認識は、従つて真理は相對的なものにすぎない。然し乍ら、相對的真理にすぎないことは、吾々が信ずるに足る可きものが存在しないという意味でないことも明らかである。一つの限定された範圍内に於てのみ真理であるということである。一十一、二は一つの真理であり、資本主義の法則は資本主義社会に於てのみ適用される真理である。

相對的と云う意味を社会性に適用して、その人の認識はその所屬する階級的立場によつて完全に規定されると考えるのは飛躍である。吾々が資本主義社会に生きていて、資本主義的意識によつて左右され、自己の所屬する階級的意識をもつ事は事実である。だがそれが吾々の意識の凡てではない。吾々は吾々の経験しなかつた過去の封建時代を、吾々の先祖の記述もしくは遺跡によつて正しく判断することが出来る。吾々は直接見たこともないピラミッドの状態を知る事も出来れば、その再現も必ずしも不可能ではない。自ら経験した事のみしか認識し得ないとするのは経験主義的偏向である。

寧ろ個人的人間は現實の総てを認識することは出来ない。彼は社会の一成員にすぎず、その意味では、彼の生活實踐は社会の一部分を示すにすぎない。人間が實踐による以外には正しい認識が得られないとすれば、彼の存在は社会の一部分に限定されてしか認識し得ない。かかる意味に於て、社会に於ける個々人の認識は夫々異り、夫々の立場に於て、夫々の部分に於てしか正しい認識を得られないとすれば、それは相對的真理にすぎない。その相對的認識が社会の一般的な真理として認められる為には、社会構成員凡てがそれを正しいと判断しうるものでなければならぬ。自然科学に於ては、同一の実験が繰り返し得る為に、又生物に於ても、たとえ動物に於ても、その頭腦の発達の際

おくれは彼らの個々の意識的なものよりも本能的なものが本質的に作用することによって、同一の状態が再現される場合が多い。自然科学に於てはそれらの理由によって万人が認めうるところの真理は見出すことが出来る。

社会科学に於ては、社会が実験は不可能であり、人間の意識的活動はその本能を制御するということを理由に、社会科学に於ける真理は自然科学の真理とは異なるということは出来ない。社会科学の正当性もそれが真理である為には、社会の誰でもが一般的にそれが正しいと判断するものでなければならぬ。而して、交通手段としての言語や、論理学の発達とは、一つの真理を他の人の認識に置きかえ一般的に伝播することが出来る。

人類の発展は他人の、又は先人の認識をその伝達機関によって正しく学びとることが出来たが故にこそ可能であった。毛沢東は「凡ての真の知識は直接的経験から来るものである。しかし、人間は何もかも直接的に経験しうるものではなく、実際には多数の知識は間接的に経験せられたものである。凡ての古代の知識や外国の知識はそういうものである。それらの知識は、古代の人や外国の人には直接に経験せられたものである。もしも古代の人や外国の人が直接に経験したものが、レーニンの指摘した条件——『科学的抽象』という条件——に合致したものであり、それが客観的な事物を科学的に反映したものであったとすれば、それは信頼するに足るものである。」と説明している。（「実践論」）

真理が相対的であるということは、人々によって真理が異なるということではない。もしかかる誤った結論が支持されるならば、將に観念論といささかの相異もなくなるだろう。労働者の認識は労働者的であり、資本家の認識は資本家的であるかも知れないが、労働者が資本家的意識をもつこともあり、又従って、資本主義の運動法則は何も労働者階級のための独占的認識物ではない。正しい認識、正しい真理は労働者にとっても、資本家にとっても同一のものでなければならぬ。それはレーニンの認識の前提によって得られたものが、正しい思考方法としての論理によって構成

される限り、相対的真理は、絶対的真理に弁証法的に発展する。

一部のマルクス学者の中には、自然科学等は上部構造には含まれないものとして、社会科学とは異なると考えるが、両者は本質的には何らの相違もない。真理の相対性は自然科学に於ても同様である。生物の遺伝については、ルイセンコ学説とメンデルの法則は対立する。それは遺伝について科学的に証明され得ない部分が残されているからであつて、何れが正しい方向を指向しているかは、その認識方法によつて判断する他はないだらう。対象に対する認識が極めて相対的な限界にとどめられている場合には幾つかの異つた学説が対立し得る。然し誰も真理は一つであることを疑ふことは出来ない。社会科学に於ても同様である。社会に関する吾々の認識は極めて相対的である。人間が意識的な存在であること、社会が極めて複雑な構成物であること、即ち、認識対象が複雑であることだけでなく、認識主体そのものが一定の社会的立場に立たされていること、従つて自己の社会的実践が一つの限定の中に於てしか不可能であるということ、従つて又社会全体の認識の爲には他人の認識を言語という交通機関を通してしか獲得され得ないこと、而も人々は社会の本質や運動の解釈を、自己の有利に導く爲の作為をイデオロギーとして表明しうること等によつて、社会についての色々な解釈や主張が存在しうる。然し乍ら、尚且つかかる階級的ドグマを越えたところの、一つの真理を見出すことが出来る筈だし、たとえルイセンコとメンデルの原理的対立に類したところの相対的な真理にすぎないものであつても、何れが正しい認識に近づき得る方法をとっているかは判定することが出来、一定の限界に於ては一つの真理をも見出すことが出来る筈である。

その意味では労働者階級的立場はやはり一つの限定された認識にすぎないし、ルカーチの云う如き労働者の意識と労働者階級意識とを区別することは出来ない。両者の関係は労働者個々人のイデオロギーが労働者階級のイデオロギーに発展するものにすぎないだらう。

マルクスの云う意味は、労働者階級の成立を見る資本主義発展の段階に於て、初めて資本主義の法則が典型的な形態に於て現われ、従つて資本主義の客観的法則が認識され得る段階に到達したという意味である。然しそのことは労働者階級のみが正しい認識を得ることを意味しないし、労働者でありさえすれば資本主義の法則は認識出来ると考えるのは、寧ろ空想的であり、非現実的である。多くの労働者は資本主義法則を認識し得ないし、現実はその証明する。もし、俗流マルクス主義者の理論が正しいならば、労働者階級が多数である資本主義社会に於て早々と社会主義革命が発生しなければならないだろう。

資本主義の客観的法則は資本家階級と雖も認識しうるし、資本主義の行詰りについての認識は、彼らの方がより早く認識しうるかも知れない。資本主義の客観的法則を認識しうるか否かは、人々が社会についてその本質を探究しようとする意志があるか否か、そしてそれを正しい認識方法によつて得られた夫々の立場の相対的真理と、そうでないところの誤つた認識方法によつて得られた虚偽のイデオロギーや、デマゴギーとを俊別しうるか否か、それらを総体的な把握に抽象化しうるか否かにかかっている。そしてその方法は唯物弁証法によつてゐるか否かによつて、それが真理であるか、虚偽であるかは明らかになるだろう。毛沢東は之らの認識の発展を感性的認識から理性的認識へとして把握する。

然し、吾々は感性的認識については又別の事が考えられる。感性的認識に就ては、労働者階級の方が資本家階級よりも遙かに、資本主義の矛盾を生活に於て実感する立場にあることである。資本家階級はその社会的地位や、収入と自己の人間的、個人的欲望の追求とに矛盾をさして感じない。彼らは選民意識をもち、一般の大衆より遙かに贅沢な生活を送ることが出来る。彼らは個人としては欲求不満を持つかも知れないが、社会人としてのそれではない。人々の間の矛盾は社会的比較に於て客観性として把握されるのである。

之れに反して、労働者は資本主義社会に於ては、社会的矛盾を常に感ぜざるを得ない。彼らは個人的、主観的には欲望に対する満足度を持つとしても、社会的矛盾を感じないわけにはいかない。社会的矛盾としての不満感は社会的関係として相対的なものであるからである。たとえ資本主義の發展に伴い、生産力の増大は間接的に労働者階級の生活水準を向上せしめ、欲望の充足がより大となったとしても、その満足度は常に一時的なものにすぎない。階級的な生活水準の隔差が存在する限り、彼らの社会的矛盾の不満感は解消することはない。彼らは社会的に、相対的に矛盾を感じる。それは主観を越えて客観的事実として存在する。それは資本主義の行き詰りに伴って資本家に対する対立感を増大せしめ、資本主義否定の意識を発生せしめる。

闕説するならば、資本主義社会の社会的矛盾の意識は所得の差によって発生せしめられる。商品社会の物神性は社会的矛盾を所得の差に感じせしめると共に、それは一方生産関係の本質を蔽いかくす。恵まれた大企業労働者は中産階級として社会的矛盾を感じなくなる。それは彼らよりも所得のより低い階層を沢山見出すことが出来るからである。一般に人々は所得が増大し、生活が向上すれば社会的矛盾は感じなくなる。この事は逆に人々は自己の所得を増大することのみによって彼らの社会的矛盾の意識を解消しようとする。即ち、資本主義的自由は社会の個々人に対してその可能性は与えられている。一方では現在の自己の社会的地位に対して不満を持つと共に、他方では立身立世欲にとらわれる。一方では富者に対する反感を抱くと共に、他方では富者の消費生活に奉仕することによってその分け前に預り、富者に畏敬の念さえ抱くのである。

以上、吾々は階級の如何を問わず、自己の経験や他人の実践によると否とを問わず、正しい認識方法によって得られた知識は、夫々の相対的境界に於ては真理であることが出来る。

然し乍ら、社会科学は百科辞典的知識の総体ではない。社会に対する認識の総体が一つの体系として抽象されて把



握される時、それは科学の名に値するものとなる。その為には弁証法的抽象の道がたどられねばならない。日本の機械工業や紡績工業の発展等の研究に於て見られる如き、一産業部門の発展史は、それが生産技術、生産規模、生産量及び価格の分析にとどまるならば、それは社会科学的知識の一部ではあり得ても、社会科学の名には値しない。総体的な生産関係としての社会との関聯として把握されねば科学的とは云うことは出来ない。従って価格分析にとどまる事なく、分配関係、従って所得分析を伴わなければならないだろう。

既に明らかにした如く、社会科学としての経済学が成立し得たのは、人間の主観的意志を越えて商品生産の物神性が支配するようになったからであった。即ち、原理論としての経済学は物神性を通して初めて科学的たり得たが、原理論は現象の本質把握の為に高度に抽象化された一般理論にすぎないのである。現実分析が単に価格分析にとどまることは逆に物神性に支配されている事を示し、科学的であるということとは出来ない。即ち、原理論としては物神性を通して初めて確立されたものが、現実分析に於ては逆に物神性を破棄することによらなければ社会科学的分析とは云い得ない。物神性は原理論把握の為に抽象の過程に於ても、又現象の原理論的把握の為に具象の過程に於ても、同様に濾紙の役割を果すのである。抽象の過程に於て、物神性によって人間の主観的意志や、自然地理的諸条件は捨象された。然し、現実分析に於ては逆に、国家として、階級として、更には貿易の問題として、人間主体や自然地理的諸条件が加味せられて分析されねばならない。

## むすび

マルクスは偉大なる社会学者であつたと共に、プロレタリアの先頭に立つ革命家であつた。彼は真理の探求者であつたと共に、生きた社会的人間であつた。彼はこの二つの立場を混同させなかった。もし、「資本論」が特定の階

級の立場に立つて書かれたものであるならば、社会科学の成果として、今日までその説得力を持つことは出来なかったらう。

一般にマルクス学者はマルクスのこの二側面を混同しがちである。同様に現代の社会科学家が、社会発展の客観的法則を求むることと、同人が又社会的主張を持つ事とは自ら別である。

マックス・ウェーバーも科学からの価値判断の追放を唱えて、「思惟する探求者」の見地をとる者に要求すると同時に、もし教師が実践的、政策的な一定の立場に立った「意欲する人間」でありたいとするならば、彼は教室を出て行って、「人生の市場」へ行けば良いと主張する。これは学者は思惟する探求者であって、意欲する人間であってはならぬという事ではない。学問として前者の立場をとり、学者も又同時に人間であるが故に社会人としては、自己の価値判断に立つが良いという事であって、「人生の市場に出てゆく意欲的人間」は学者ではないという意味ではない。「人生の市場」に出てゆく人間も、又学者と同一人物である。彼は教壇に立つ時「思惟する探求者」に復歸するだろう。マルクス主義者とは社会主義実現を目的とする人々を指すかも知れないが、社会科学としてのマルクス主義は主観としての社会主義とは何らの関係もなく、又階級的立場に立つものではない。労働組合の賃上げ斗争等は資本主義的論理の表現であり、資本主義的倫理の発現である。マルクス主義社会科学は唯物弁証法的方法論に則るものであり、又唯物弁証法こそ社会科学の真理への接近の可能性を与えるものに他ならない。